

水産ジャーナリストの会

会 報

NO. 127

Japan Fisheries Journalists' Association

2014年2月3日

水産ジャーナリストの会

＝会長：岸 康彦＝

事務局：中村 謙一

(横浜市青葉区田奈町 31-27)

090-3342-9116

nakakensinra@gmail.com

年度賞に「燃料消費の見える化装置」

＝2014年度定期総会開く＝

水産工学研究所に表彰状授与

2014年度定期総会を1月27日に大日本水産会大会議室で開催し、2013年度事業報告・決算、2014年度事業計画・予算を了承するとともに、2013年度年度賞の「燃料消費の見える化装置」を開発した水産工学研究所（大石浩平所長）を表彰した。



右から大石所長、溝口研究員、岸会長

総会の冒頭岸会長が挨拶し、議事に入る。事務局が事業報告、事業計画などを説明しいずれも了承を得たが、13年度は研究会活動などが不活発であったことを反省し、14年度は時宜を得た研究会テーマの一層の発掘に努めつつ研究会回数を増やしていくこととした。また、研究会への出席者が減少傾向にあるの

で積極的な参加を促した。



議事後懇親感に移り、まず業界を代表して大日本水産会の重義行専務が挨拶。「現在の日本漁業は構造的な問題も含め、魚食の減退など多くの課題がある。そうした中で大水は国民に美味しい魚を届ける多くの会員が何とか

しようと努力している。ジャーナリストの皆さんにはこれまで専門的な知識を生かして正確な情報を報道していただき感謝している」と述べ、さらに「今年は水産日本復活の年と位置付け、ファストフィッシュによる消費の拡大、ETROとのマーケティング強化による輸出の拡大、遅れている EU 向け HACCP の認証取得などを通じ、世界市場にも日本の水産物を売り込んでいきたい」と語った。

この後年度賞の表彰式に移り、岸会長から「見える化装置」を開発した水工研の溝口研究員に表彰状が贈られた。表彰式の後水工研の大石所長は「当研究所が開発した見える化装置が年度賞に選ばれ、うれしいと同時に本当に感謝している。この装置は特別なものではなく、既存の装置を組み合わせて開発した。陸上では車の燃料消費の見える化は当たり前だが、漁船ではこの装置が初めてとなる。船速を適切にコントロールすることで、燃料の大幅な節約が確認されている。省エネなどの研究成果を現場への普及を図るためのガイドブックも作成しており、蓄積した知見を現場に浸透させるため 2 月に省エネ普及チームを発足させ、漁協などで説明会を行っていく」と抱負を述べた。



次いで懇親会に移り海に幸に感謝する会の島一雄会長(写真)の温度で乾杯、しばしの間出席者の歓談が続き、梅崎幹事の中締めでお開きとなった。